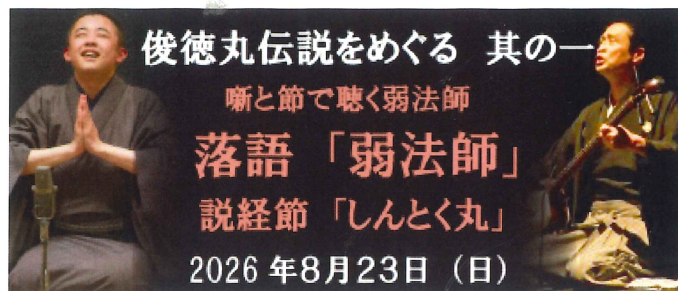


白鷹緑水苑開苑 25 周年特別企画 1



継母の呪いで視力と美貌を失い絶望の淵に陥った主人公が、許嫁の献身的な愛と観音の霊力によって救われるという「俊徳丸伝説」。大阪の四天王寺を重要な舞台としたこの物語は、まず説経節に現れ、能や浄瑠璃、歌舞伎、落語など、様々な形へ展開されてゆきました。そこには、名も無き遊芸者によって門前や辻々で語られた芸が、やがて日本を代表する芸能へと、語り芸を軸に大きく変貌していった様子がうかがえます。この道筋をたどる、《白鷹緑水苑開苑 25 周年》特別企画の第一弾として今回お届けしたのが、古い語りの形をとどめる説経節「しんとく丸」と、昭和に落語として成立した「弱法師」です。



謡 上田拓司（観世流シテ方）
小鼓 久田舜一郎（大倉流小鼓方）

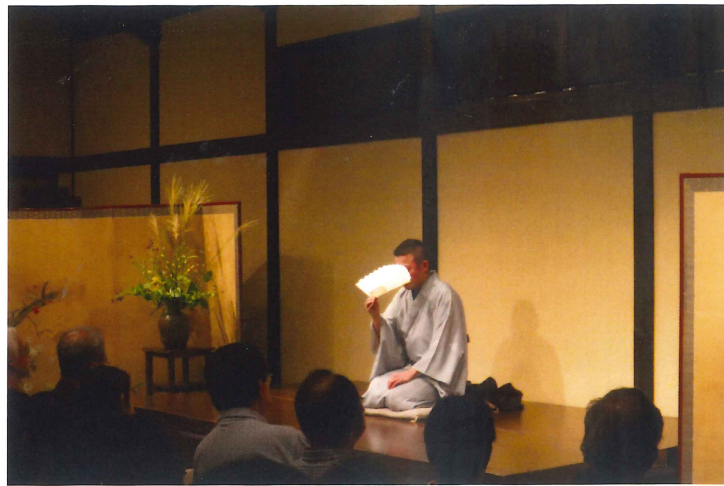
冒頭は特別出演による能楽小鼓と謡による一調「弱法師」もお聴きいただきました。ここでは「日想観」の場面が登場します。これは真西に陽が落ちる彼岸の中日に夕陽を眺めて西方極楽浄土を観想するという信仰です。当時、四天王寺の西には間近に海が迫っていて、彼岸の日没時にはその海に大鳥居の真ん中を通して夕陽が沈むので「日想観」を体感できるとして、多くの参詣客で賑わいました。本日はその場面を通常の演奏とは異なる特殊演出にてお聴きいただきました。



三代目 若松若太夫

続いて説経節「しんとく丸」です。説経節とは本来人の多く集まる社寺の門前などで、庶民相手に仏の教えを広めるために語られた物語に端を発しており、神仏の霊験譚や社寺の縁起などがベースになっています。

「しんとく丸」では、観音の霊力が救いにつながるのですが、そこに至るまでの味わう艱難辛苦をいかに労しく語り、聴衆の涙を誘うかが説経節の語りの妙だということです。特にしんとく丸が簞笠、杖とともに四天王寺に捨て置かれたことを気付く場面の哀れさは、まさに語りの真骨頂です。



桂 吉坊

休憩をはさんで後半は落語「弱法師」です。「息子の追放」「乞食になる息子」「春の四天王寺」「親子の再開」という共通項はあるものの、同名の能とは異なる展開を見せる落語「弱法師」です。枕で「この噺があまりかからないのは、全く笑うところがないからです。」（ここで唯一会場から笑い）の言葉通り、終始客席は水を打ったように静まりかえっていました。それだけ観客の心を鷲掴みにするような展開だったということで「笑うところのない」噺に客席はぐいぐい引き込まれてゆきました。扇子で顔を隠して発する物売りの声で月日の流れを表現するなど、語り芸としての落語の存在に改めて気付かされる思いがしました。



最後は説経節・能・落語の演者によるトークです。それぞれの作品の成り立ち、演じるうえでの葛藤、共通のテーマを持つ作品同士がどのように影響し合っていたかなど、演者から直接うかがう貴重な機会となりました。